

Title	尿管腫瘍と鑑別困難であった尿管ポリープの1例
Author(s)	本多, 正人; 中村, 正広
Citation	泌尿器科紀要 (1992), 38(11): 1257-1260
Issue Date	1992-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/117703
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

尿管腫瘍と鑑別困難であった尿管ポリープの1例

公立学校共済組合近畿中央病院泌尿器科 (部長: 中村正広)

本多 正人, 中村 正広

URETERAL POLYP: A DIFFICULT CASE TO MAKE A DIFFERENTIAL DIAGNOSIS WITH URETERAL TUMOR

Masahito Honda and Masahiro Nakamura

From the Department of Urology, Kinki Central Hospital

We report a case of primary fibroepithelial polyp of the left ureter. The patient was a 34-year-old man, complaining of left flank pain. An excretory urogram and retrograde pyelogram revealed left hydronephrosis and filling defect of the middle third of ureter. It was difficult to make a differential diagnosis with ureteral tumor. A frozen section revealed no malignancy and we performed partial ureterectomy and end-to-end anastomosis. We discussed the clinical features of adult primary ureteral polyp reported in the Japanese literature.

(Acta Urol. Jpn. 38: 1257-1260, 1992)

Key words: Ureteral polyp, Ureteral tumor

緒 言

尿管ポリープは比較的稀な疾患ではあるが本邦報告例はすでに150例を越えている¹⁾。今回われわれは尿管腫瘍との鑑別が困難であった尿管ポリープの1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告したい。

症 例

患者: 34歳, 男性

主訴: 左側腹部痛

家族歴・既往歴: 特記すべきことなし

現病歴: 患者は約3年前に肉眼的血尿および左側腹部痛を自覚し他医を受診。排泄性および逆行性腎盂造影検査にて左軽度水腎症および左尿管壁の不整を指摘されたが放置していた。以後3~4カ月に1度左側腹部の鈍痛を自覚することはあったが約1年前より痛みの頻度およびその程度が増強してきたため1990年1月当科を初診した。

現症: 左側腹部に軽度の叩打痛を認める以外特に異常は認められない。

初診時検査成績: 一般検血, 血液生化学検査では特に異常は認められなかった。検尿所見では4~5/hpfの軽度の血尿を認める以外, 特に異常は認められなかった。尿細胞診はclass IIであった。

DIP 所見: 著明な左水腎症を呈し左尿管は腸骨部

領域で閉塞所見が認められたが, 結石陰影は認められなかった。

RP 所見: 同部尿管は約5cmにわたり陰影欠損が認められ不整である (Fig. 1)。カテーテルは通過せずカテーテル尿細胞診はclass IIであった。膀胱内には特に異常は認められなかった。約3年前の症状初発時に他医で施行されたRPでは軽度の尿管壁の不整像が認められたが, 結石陰影は認められなかった。

CT 所見: 同部尿管内に充実性に腫瘍の存在を示唆する所見が認められそれより高位の尿管は著明な水尿管を呈している。結石陰影は認められない (Fig. 2)。

以上の所見から左尿管腫瘍が疑われ左腎尿管全摘出術を考慮したが, 比較的若年であること, 経過が3年以上と比較的緩徐であること, カテーテル尿細胞診が陰性であること等から良性あるいは悪性度の低い場合も有りえると考え, 術中迅速病理検査を施行したうえで術式を選択する方針で1990年2月9日手術を施行した。

手術所見: 左尿管は総腸骨動脈交叉部よりすこし高位で腫瘍によると思われる硬結を約3cmにわたり触知したため約1cmずつの余裕をとってその部を切離し迅速病理検査を施行した。病変は間質の浮腫性変化が主体で上皮の増生所見に乏しく悪性所見は認められなかったため, 残尿管を端端吻合しWJカテーテル留置および左腎瘻造設術を施行, 手術を終了した。

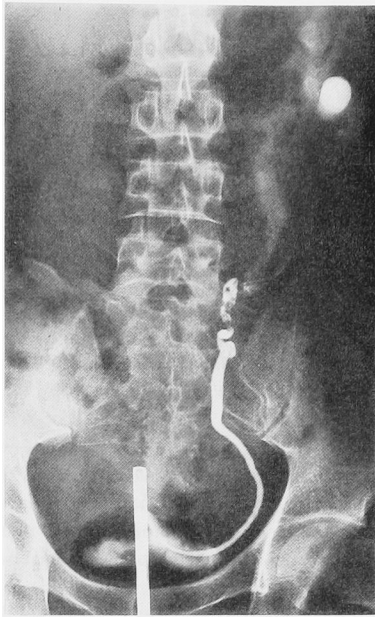


Fig. 1. RP shows irregular shadow defect of left ureter

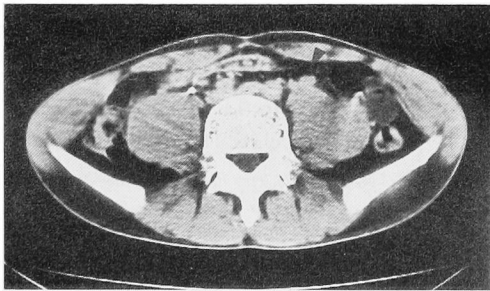


Fig. 2. CT shows obstructed soft mass in left ureter without stone

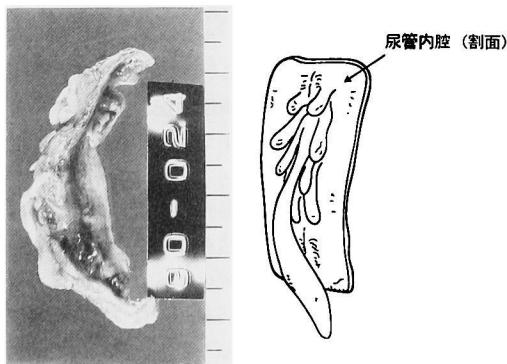


Fig. 3. Gross specimen shows ureteral polypoid lesion with papillary change

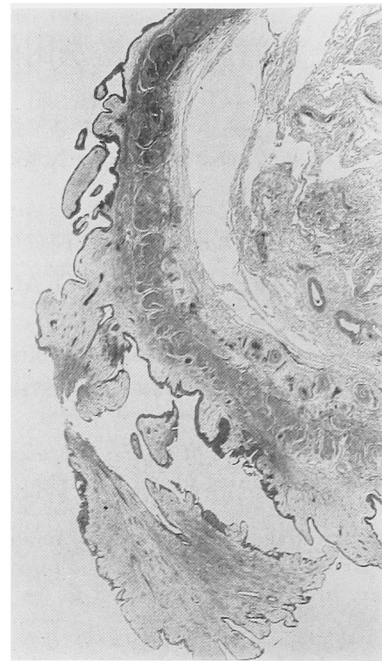


Fig. 4. Microscopic examination shows fibroepithelial polyps without inflammatory change

摘出標本・尿管内には約 3 cm にわたり乳頭状の隆起性変化が認められ一部は約 3.5 cm 長の乳白色のポリプ様所見を呈していた (Fig. 3)。

病理組織学的所見：尿管粘膜上皮に増生所見は乏しく、間質は浮腫状で乳頭状に内腔にむかって突出していた。肉眼的にポリプ様所見を呈していた部位も同様に間質は浮腫状、疎な結合組織からなり血管および平滑筋組織も含まれる。一部にごく軽度の炎症細胞の浸潤は認められるものの全体的に炎症所見は乏しく fibroepithelial polyp と診断された (Fig. 4)。

術後経過は順調で DIP 所見も改善し、約 2 年を経過した現在再発の徴候は認めていない。

考 察

尿管ポリプは中野 (1949) の報告以来すでに 150 例以上の報告があるとされるが¹⁾、それらは結石などに続発した二次性ポリプと明らかな誘因のない原発性ポリプとに大別され、後者はしばしば 5 cm 以上に長大化する傾向がある²⁾。尿管ポリプの定義は Scott らによれば中胚葉由来の非上皮性のもので、外観は細長い紡錘型を呈し、表面は移行上皮で被われ間質成分が主体であるとされている³⁾。このような状態に炎症などの修飾が加われば若干の病理学的な変化が

生じてくるものと予想される。移行上皮癌との合併例は報告されているが⁴⁾ 稀であり、原則的には尿管ポリープは良性の疾患であり、その治療にあたっては腎臓は保存すべきであると考えられる。従って術前診断において尿管腫瘍との鑑別がもっとも重要な問題となる。一般的に尿管ポリープの画像診断としては細長いという形態的特徴から、DIP や RP では陰影欠損が細長く表面平滑であること、尿管壁から遊離したような所見をとること、陰影欠損の程度と比べて尿の通過障害の所見が少ないこと等があげられ³⁾、また CT では尿管内腔に浮遊した腫瘍像等が報告されている⁵⁾。また下部尿管に発症しかつ長大化している場合は膀胱鏡検査にて尿管口から突出して浮遊している腫瘍としてとらえられた症例も散見される^{1,6)}。このような所見を呈した場合は術前に尿管ポリープの診断は可能であろうが尿管腫瘍との鑑別が困難であったため腎尿管全摘出術が施行された症例も多い²⁾。高村ら¹⁾ は 5 cm 以上に長大化した尿管ポリープを46例集計しているがそれによれば最近の報告例では腎臓を保存された case が多い。ポリープが細長く長大化すれば上記のような検査上の所見を呈する頻度も増加するかもしれないが自験例の様にポリープも比較的短くかつ他にも乳頭上の隆起性変化を伴う場合は、結石等が伴えばある程度予測も可能であろうが、そうでなければ尿管腫瘍との鑑別はきわめて困難であるといえよう。そこで結石等を伴わない、いわば原発性ポリープというべき症例の臨床的背景に対して若干の文献的考察を加えたい。15歳以下の小児尿管ポリープには、原発性がほとんどで男子に多く、左上部尿管に発症することが多いという特徴があるが⁷⁾、今回われわれは16歳以上で、結石等ならん誘因を伴わない尿管ポリープ本邦報告例のうちで詳細の明らかな75例に自験例を加えた76例について、年齢、性別、side、部位に関して検討を加えた。

1) 年齢および性別: われわれが集計しえた76例では男性32例、女性44例とやや女性に多い傾向を示した。年齢は15~29歳が29例(男性13、女性16)、以下30~39歳15例(男性8、女性7)、40~49歳22例(男性8、女性14)、50~59歳5例(男性1、女性4)、60~69歳4例(男性1、女性3)、70歳以上1例(男性)であった。49歳以下の症例が76例中66例(86.8%)を占め男性では49歳以下の症例が32例中29例(90.6%)、女性では44例中37例(84.1%)であった。以上から尿管腫瘍と比べて比較的若年例に発症し、特に男性にその傾向が強いようである。

2) side および性別: 右側25例、左側51例と左側に多い。男性では左側が32例中24例(75%)、女性では

左側が44例中27例(61.4%)と特に男性にその傾向が強い。これは30歳以下の症例のほとんどが左側であることも含めて、その発症が先天的誘因であろうとも推測されている⁸⁾ 小児の尿管ポリープの特徴を反映しているためと推測される。

3) 部位および性別: 76例中上部尿管が27例、中部尿管が17例、下部尿管が32例と特に部位による差はないように思われたが、性別で検討すると男性では上部尿管が32例中22例、中部尿管が4例、下部尿管が6例と上部尿管に多い。これも発見時期の関係から、すでに述べたような小児の尿管ポリープの特徴が反映しているのかもしれない。これに対し女性では、上部尿管が44例中5例、中部尿管が13例、下部尿管が26例と中下部尿管に多く、男性との大きな相違点と考えられた。

すでに述べたように尿管ポリープの治療では腎臓は保存すべきであると考えられるので、以上のような臨床的背景も考慮にいれて尿管ポリープの可能性もあると考えられる場合は術中迅速病理検査を施行した上で術式を決定すべき症例もあると思われる。自験例ではなしえなかったが、尿管鏡生検にて術前診断が可能であった症例も報告されており⁹⁾。今後有用な検査になるであろうと考えられる。治療法は自験例の様に多発性に病変が存在する症例やポリープの1部に移行上皮癌の合併をみた症例も報告されていることから⁴⁾、ポリープのみの切除ではなく尿管部分切除術が適当であると考えられる。自験例では尿管を再吻合することが可能であったが切除範囲が長く再吻合が困難な場合は自家腎移植等も考慮にいれて⁹⁾ 極力腎臓は保存すべきであろう。

結 語

34歳男性に発症し、尿管腫瘍との鑑別が困難であった尿管ポリープの1例を報告するとともに、結石等の誘因を伴わない16歳以上の尿管ポリープの本邦報告例からその臨床的背景に関して若干の文献的考察を加えた。

本論文の要旨は第138回関西西地方会にて発表した。

文 献

- 1) 高村真一, 鈴木靖夫, 坂田孝雄, ほか: 長大な尿管ポリープの2例と本邦46例の検討。泌尿紀要 35: 323-328, 1989
- 2) 大沢哲雄, 青島茂雄, 武田正雄: 尿管ポリープの2例。西日泌尿 41: 147-151, 1979
- 3) Scott WW and McDonald DF: Tumors of the ureter. In: Urology, Edited by Campbell MF and Harrison JH. 3rd ed., pp. 977,

Saunders, Philadelphia, 1970

- 4) 崎山 仁, 鍋倉康文, 山本敏広, ほか: 長大な尿管ポリープの2例. 西日泌尿 **46**: 1121-1123, 1984
- 5) 長谷川倫男, 鳥居伸一郎, 望月 篤, ほか: 尿管鏡生検で診断した尿管ポリープ. 臨泌 **42**: 157-159, 1988
- 6) 榊知果夫, 岡田克彦, 三田憲明, ほか: 長大な尿管ポリープの1例. 広島医 **44**: 198-200, 1991
- 7) 児島真一, 笥 龍二: 小児尿管ポリープの1例.

臨泌 **44**: 1007-1009, 1990

- 8) Soderdahl DW and Schuster SR: Benign ureteral polyp in the newborn. JAMA **207**: 1714-1715, 1969
- 9) 杉山寿一, 加藤範夫, 伊藤正也, ほか: 自家腎移植により腎保存可能であった尿管ポリープの1例. 泌尿紀要 **35**: 111-114, 1989

(Received on March 30, 1992)

(Accepted on June 26, 1992)